
不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

トロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

【NNコード】

N6548Y

【作者名】

トロ

【あらすじ】

自他共に認めるヤンキーの早森いなほは、ある日死の運命にあつた少年の運命を変えたことに目をつけられ、謎の男に異世界に吹き飛ばされた。

元の世界にはいなかつた人の天敵である魔獣、そして魔力を用いて使われる魔法の存在。ファンタジーと呼ばれる世界にて、いなほにあるのは己の五体が唯一つ。

唸る筋肉！暴れる筋肉！異世界ファンタジーなんのその。男ひたすら拳を固め、貫き通すは我が信念。無茶と無謀を笑われようが、鋼

の肉体漲らせ、筋肉馬鹿が我が道のみ行く。

端的にまとめると、荒唐無稽マッスルファンタジーです。よければ一読のほうをよろしくお願いします。

第一話【祈る少女とぶつ飛びヤンキー（軽傷）】（前書き）

筋肉つて凄い。全編通してそんな話ですので、注意を。

第一話【祈る少女とぶつ飛びヤンキー（軽傷）】

別に現実を理解していわないわけではない。

ただ単純に、藁にすらすがらなければならないほど、現実が冷たいのだ。

「願いを捧げる。私の夢、私の理想、あなたを象る全てが、私の願いという血肉で成る」

少女は大地に膝をつき呪文を歌っていた。彼女の膝もとには、土の大地に描かれた下手くそな魔法陣が一つ。北に太陽を書き、西に盾を示し、東に剣を描く、そして南に少女が一人。中央には東西南北を繋ぐ星の印。

それは、ありもしない魔法陣と呪文だ。だが少女がそんな新しい魔法陣と呪文を生み出したのかと言えば、そうではない。少女は簡単な魔法こそ使えるが、せいぜいはちょっととした炎をともしたりといつた程度、召喚を行えるほど、ましては新たな魔法を使えるほどの卓越した魔導師ではない。

「理想を紡ぎ、理想と化せ。あまねく悪をかき消す光、祖は太陽、其は無限の勇気を抱く奇跡」

だが詠唱は続く。両手を組んで胸の前、祈りを捧げる少女がまとう衣服はただでさえぼろぼろの上、土で汚れて水ぼらしい。体にはいくつもの擦り傷、そして足首は痛めたのだろう、青く腫れているが、それらの傷の痛みを押し殺し、少女は意味のない詠唱をひたすら綴る。

少女は逃げてきた。平和な日常の中、ある日突然村を襲撃してき

た巨大な魔獣、トロールの群れに追い立てられ、少女は家族、友人、全てに守られ逃げあおせた。魔獣の群れにより鮮血に溢れることになつた村から逃げ、森に入り込み、ただ闇雲に走つた。そしてつい先ほど、森まで追い立ててきたトロールにより、少女は友人と家族と引き裂かれ、一人孤独に逃げ続け、ついに足首を痛め大地に屈したのだ。

自分は無力だ。か細い腕に足、魔法を使えるほどの魔力もないたの少女。そんな自分に何ができるわけでもない。でも助けたかった。助けてほしかつた。この理不尽を救う奇跡が欲しかつた。

「其の総称は人の夢。其の理想は世界の夢。大いなるあなたよ、大いなる奇跡よ、この身、この言靈に応えたまえ」

詠唱は続く。だがその詠唱は、今少女の横に置かれた誰とも知らぬ人が書いた『絵本』に記されたものだ。そう、それはただの御伽話の言葉に過ぎず、どんなに願おうが祈ろうが、その全てに意味はない。

だが少女は歌う。歌うように祈る。藁にもすがろう。藁にしかすがれないから、藁にだつてすがつてみせよう。

絵本の名前は『太陽の勇者』。悪の魔王を打倒する偉大な勇者の物語。そして、少女が歌う詠唱と、下に描いた魔法陣こそ、絵本に出てくる勇者召喚の召喚魔法。

不可能である。出所不明の絵本の在りえない詠唱に意味はない。

詠唱は続く。でも少女にはこれしかなかつた。小さなころから、手垢で汚れても読み続けたこの理想の英雄に願うしか、少女には残されてなかつた。

だから祈る。お願いと、どうか奇跡よ起こつてくださいと。

「誓約は今。应えよ、应えよ、奇跡を具体せよ。この世界に光をもたらせ」

お願いします。それだけが、弱い少女にできる唯一の抵抗だから。

「太陽の勇者よー。」

来て！両手に力を込める。だが、どんなに待っても、少女の描いた魔法陣には何かが起きるわけでもなく、響くのは森の木々のざわめきばかり。

「そんな……」

わかつていたけれど、それでも奇跡のない現実に少女は今度こそ力を失った。組んだ両手は力なく大地につき、絶望感が少女の肩に重くのしかかる。

現実の理不尽を打倒する奇跡の存在はない。世界はいつも冷たくて、少女の穏やかな日常を守ってくれる英雄はない。

「どうしよう……お母さん、お父さん、エイミー、トト……」

溢れる涙は、彼らへの罪悪からだ。何もできなくて「めんなさい」。弱くて「ごめんなさい」。

私には何もできない。圧倒的な力を前に、私はただただ逃げるだけしかできないんだ。

少女の中の芯が碎ける。犠牲にして逃げるだけの己への自責の念に潰されそうになる中、不意に木々のざわめきではない、木々をへし折る音が聞こえてきた。

それは膝をつく少女にどんどん近付いてくる。そして、最早動くこともできない少女の前に、音の主は現れた。

「あ……」

悲鳴すらあげられない。少女の前に現れたのは、少女の倍以上はあらうかという巨体の、緑色の皮膚をもつ異形の怪物。トロールと呼ばれる魔物は、恐怖に震える少女を見下ろして、手に持つ棍棒を見せびらかすように掌で弄ぶ。

トロールを見て、少女の記憶が掘り起こされる。突如群れをなして村を襲撃してきたトロールの群れ、駐在していた兵士は闘うでもなくなきなさけない悲鳴をあげて一目散に逃げ、村の人々が次々と死んでいく地獄が具現した世界。それでも母親や友が自分をここまで逃がしてくれたこと。

「嫌だ……」

立ち上がりもせずに、後ずさる。足首の痛みのせいか、最早起き上がることさえ難しいのが見て取れた。森のなかで転び、運悪く木に打ちつけてしまったときの怪我だ。これがなければ、少女はひたすらに逃げていただろう。

だがもう逃げられない。運悪くトロールに見つかった今、少女を守る優しい母に、頼もしい友人達がいなし以上、少女の命運はすでに決していた。

「グビヤビヤビヤビヤ」

汚らしい鳴き声をあげながら、トロールがジリジリと少女に近づく。あくまでゆっくりと、絶望に沈む少女を見て楽しむように。

だがそんなトロールの下衆な思考など理解する余裕のない少女は、必死に後ろに下がるしかできない。大地に刻んだ魔法陣が後ずさる度に少女の体で消されていく。まるで願った奇跡はただの張り子であると言わんかのように、呆氣なく消える少女の理想。

一步踏み込んだトロールが、少女の絵本を踏みつぶした。踏みに

じられ、蹂躪される少女の夢、理想。ありもしない奇跡に意味はない。世界はどこまでも理不尽で、この世に奇跡をもたらす勇者はない。

「嫌だ……」

「ゲヒヤヒヤヒヤ」

「嫌だ……！」

次々に零れる涙。否定しても迫る悪夢。と、少女の背中がついに木にぶつかった。これ以上逃げられない。絶望と恐怖、嫌だと言おうが、トロールはその醜悪な容貌に笑みを張り付けて少女に向けて手を伸ばし

「誰か、助けて！」

吐き出される生への渴望。か弱い少女の、最後の抵抗。

瞬間、何の前触れもなく、トロールの手が横合いから伸びた手に掴まれた。

早森いなほは人類である以前に、喧嘩しか能のない糞つたれの畜生であると豪語するくらい、見た目も中身も筋金入りのヤンキーだ。茶色に染めて痛んだ短髪に、眼力鋭い目つき、二メートルに届くか

とこう長身の彼は、道端であれば誰もが道を譲るほどの威圧感を放つていた。

何よりもその威圧感の元となっているのは、鋼か何かと見間違うくらいに屈強な筋肉だらう。世間的には細マツチヨと言われるような、厚すぎない筋肉だが、筋の一本まで丹念に鍛えた肉は、そちらの鉄なんかよりも遙かに頑丈である。実際はただの細マツチヨなどではない。見栄えだけの余分な筋肉を搭載しない、戦いに特化した攻撃的肉体こそいなほの自慢なのだ。

そんな男が、まさか積載量一杯の十トントラックに轢かれそうになつた少年を庇つて轢かれ、さらに吹き飛んだ先で落ちてきた鉄骨に潰されたあげく、鉄骨をどけようとした瞬間ガス爆発に巻き込まれたのはなんという悲劇か。

ともかく何の気まぐれか、いらん正義感を發揮したいなほは、まるで少年を確実に殺そうとした連續攻撃を代わりにもらつて、最後の爆発で結構な深手を受け氣絶したはずだつた。

普通は死んだと思うようなダメージの連續だが、いなほは自分が事故などというしょもないことで死ぬなど考えもしなかつた。せいぜい『もしかしたら骨折れたかもな』程度の認識である。

だが流石の彼も目覚めたらまるで自分に怪我がなかつたといつことには驚きを隠せなかつた。しかも世界各国のあらゆる文字と、地球にはない文字がいくつも浮かんだ空間について、目の前にそんな空間に似合わない革製の豪華なソファーに座る、ソファーに似合わないぼろぼろの黒いマントをまとつた陰鬱な面持ちの男がいるとなれば、自分の正気を疑うのも致し方ないだらう。

「あー……なんだ、これ」

ガシガシと茶色に染めすぎて痛んだ髪を搔き鳶り、いなほは男の前今まで歩み出た。

「で？ こんなとこに連れ込んだのはアンタか？」

「……」

男を見下ろすが、男はいなほを見上げて視線を交わすだけで、何かを言おうとはしない。ムカつく態度にいなほの頬が引きつる。ガキの頃から喧嘩っぽやく、生粋のヤンキーとして生きてきたいなほにとって、自分を無視するような態度は、すなわち喧嘩の合図に他ならなかつた。ただでさえ訳のわからない場所にいるのだ。いなほの沸点はすでに振りきれていた。

「テメー」

「例えば、水が上から下に流れるがごとき覆しようのない必然、それが運命だ」

その胸倉に掴みかからうとしたタイミングで、男が口を開いた。ボソボソした声の癖に、何故か沁み渡るようないなほの心に響く。出鼻を挫かれ、しかも訳分からない話をしだしたとなれば、いなほの動きが止まるのも仕方あるまい。

内心の苛立ちをぶつけるタイミングを逃したいなほは、糀然となり面持ちで、男の隣の空いてる場所に大股開きで座つた。男の座るスペースすら侵略して座るのはせめてもの意趣返しか。だが男は特に気にしたそぶりもみせず、淡々と、やはり陰鬱なまま口を開く。

「だが、そんな必然を覆す者がいる。因果の否定、絶対運命の改变。激流に抗う矛盾存在。しかしその資格を持つ者が、誰しも運命を覆せる力を持つわけではない。大切なのは不倒不屈の強靭な鋼の意志。これがなければ、資格を持とうが因果の否定を行うことができない。現にこれまで、資格の保有者で運命を覆した者は一人しかいなかつ

た。お前で一人になつたがな

「へー」

話している内容など、県内最底辺の高校にぎりぎり合格した程度のいなほにわかるわけがない。いなほは男の言葉は話半分に、周りの増えたり消えたりを繰り返す幾つもの文字を田で追いつきに集中していた。

だが構わず男は話を続ける。陰鬱なまま、しかしどこか願うつよつなその口調。

「お前はあの少年の死の運命をその意志のみで打ち壊した。それで私は確信したよ。お前こそが私の望んだ者なのだと。だからお前をこちらに引き寄せたのだ」

「……おい、そりや」

少年とは、あの事故で庇つた少年のことだろう。言つてゐるのとはさっぱりだが、知つていることならば興味はある。

「安心しろ。少年の因果の鎖は生存の方向に切り換わった。矛盾を嫌う世界の選択はそちらじー」

「なんだ、つまりガキは死んでないのか?」

「ああ。お前がそうした」

「……けつ、しぶといガキだぜ」

悪態とは裏腹に、いなほの表情はどこか穏やかだ。口は悪いが、

心より少年の安否がわかつて安心しているのが見て取れた。

「……お前を待っていた」

安堵するいなほに、不意にそんなことを男が呟いた。いなほは眉をひそめる。当然だ、いなほには男との接点がまるでないのだから。

「先に言つておく。お前はあの世界では死んだことになつてゐる」

「道理が通らねえなあ。俺アこの通り無傷でピンピンしてんぜ?」

「怪我のまゝに至る途中で私が治しておいた。軽い火傷と右肩の脱臼と骨にひびが入った程度だったものもあるが、専門外でも除外、何とでもなるものだな」

「つまりテメエが俺の怪我を治したってのか?」

「ああ、そしてその代わりに、お前にはいぢりの世界に来てもらいつ。後は好きにやれ」

唐突な話に、いなほは言葉を失つた。何を言えばいいのかもわからず、そもそもやはり言つてる意味がわからない。

当然、男はそのまま続ける。語りだすその顔は、僅かな安堵が現れていた。

「さて、今更だが自己紹介と別れの挨拶をしよう。私は第十一位『帰結運命』。名前はレコード・ゼロ。勝手にこちらに来てもうつ上に身勝手な願いだが、どうか一つだけ私の願いを聞いてほしい」

突如、謎の空間に光が満ちていく。いなほはその急な変化を、何

故か当たり前のよう受け入れていた。思えばそうだ、こいつの話は理解はできないし意味不明だが、何故か『受け入れられる』。

「おひ。何だ」

だからいなほは、不思議と素直に男、レコードの願いを聞き入れようと思った。光に包まれ、何もかもが白に染められていくが、心中は穏やかなものだ。いつの間にかソファーに座っている感触もなくなり、自身の肉体も曖昧になつっていく。

それでも、その陰鬱な言葉は、

「世界の運命を、打ち碎いてくれ」

どうしてか、頭ではなく、心の芯に重く響き渡つた。

「……」

光が消えると、文字が浮かぶ部屋の景色が戻ってきた。果ての見えない広大な空間にただ一つ置かれたソファーには、先程まで座つていたいなほの姿はない。変わらず陰鬱な面持ちのレコードがただ一人。次々に浮かんでは消えていく文字群を見据えている。

「さよなら、いなほ。何、君がそのまま不屈なら、必ずまた出会え
るわ」

紡ぐ言葉を聞く者はいない。だがそれでも眩くレコードの瞳の奥底には、薄暗い情念の炎が灯っていた。

第一話【祈る少女とぶつ飛びヤンキー（軽傷）】（後書き）

次回、ヤンキー大地に立つ。

第一話【ヤンキー少女】（前編）

この小説は

筋肉→物理法則

となっています。

第一話【ヤンキーはんび】

目が覚めると太陽が眩しいくらいに頭上で輝いていた。

久しく感じたことのなかった土の感触と匂いが全身を包んでいる。涼しげな葉鳴りを響かせる森の鳴き声が心地よい。

どうやら自分は倒れているらしい。混乱するでもなく冷静に、森の中にいることをいなほは理解した。

上体を起こし、ややまどろんだ頭でこれまでを改める。

ガキを底つた俺はトラックに轢かれ、鉄骨に潰され、ガス爆発に巻き込まれた結果、レコード・ゼロと名乗った男に助けられ、ここに飛ばされたことになった。

そして、ここが地球でも日本でもないことも理解していた。別の世界であるといふ何となくの知識がある。

異世界。そう、異世界だ。今まで自分がいた世界とは別の世界。意味はわからないが体感的に理解はした。

よつはこじが日本ではなく外国という解釈でいいのだらう。

「つまりアメリカってことだな」

いなほは単純明快な馬鹿だった。

ともかく、この知識はどうやらレコードの奴がじわくさに紛れて自分にもたらしたのだらう。頭の中に『そのまま送るのは不便と思つたのでな』というレコードの言葉が浮かぶ。

そう思うならなんで元の世界になんて返さなかつたのか。別れが惜しいと思う奴も一応は何人かいるし、勝手に飛ばすのは道理が通らない等と悪態をつきたくもなるが、

「まあ、しょうがねえ」

起きてしまったことを愚痴るのは性分ではない。あいつが事故で怪我した自分を救つたのもまた事実。かつての世界に未練がないわけでもないが、こうなっては仕方ない。俺は切り替えの早いナイフな男なのだ。

などと自分を奮い立たせるついでに立ち上がる。ご丁寧に、黒のタンクトップとひざ丈の短パンにサンダルと、事故当時の格好はそのままだ。爆発で吹っ飛んだにも関わらず服装がそのままなのはいなほとしても助かる。全裸で森に置かれたただの変態以外の何者でもないのだから。

体にも怪我ひとつない。試しにいなほは近くの木に向かって構えると、深く呼吸。サンダルを脱ぎ棄てて裸足になり、後ろ足を蹴り上げる。鞭を振るうように斜め上に走るつま先、それは木に着弾する間近、腰の回転も加えられさらに速度を増すと、轟音と共に木に叩きつけられた。

人の胴程もある幹が、いなほの蹴りの絶殺に負け、乾いた音と共に真横に折れる。その音は人外の一撃に負ける木の断末魔だ。トルツクに鉄骨、はてに爆発をもつて、ようやくちょっと危ない程度のダメージしか受けないいなほの保有する筋肉の堅牢は、攻撃という点に関しても無類の火力を与えていた。

まさに人類の皮を被つた猛獸の一撃を、いなほは当然とばかりに領き一つで受け入れた。人にはありえない戦闘能力。だがそれこそが、彼を近隣の不良、果てはヤクザすら屈服させるに至った所以に他ならない。単純な筋肉の質量と、その過程で培つた格闘術こそ、いなほが絶対の信頼を置く武器なのだ。

「う、し……体はまあ大丈夫か」

それだけ確認したいなほだが、さてここで問題が起きた。そもそも、自分はここで何をすればいいのだろうか。好きにやれとレコー

ドは言つていたが、自由すぎるのも困りものだ。

せめてどつかの町にでも置けよ。とサンダルをはき直しながら内心で悪態。ともかく、早く町に出よう。ズボンの尻のポケットには都合よく財布もある。新たな世界に飛ばすとか言つていたが、いなほ的には外国のどつかに飛ばされたのかかもしれないと解釈した。だとしたら財布の円では意味ないかもしないが、そこはあれだ、いざとなつたら悪そうな奴捕まえて金を巻き上げればいいだろう。

呼吸を一回。排氣ガスの溢れていた世界とは違う空気を肺一杯に取り入れ、その時には頭はもう冴えわたっていた。

「おーし、まずは真っ直ぐだ。んでムカつく奴は殴つて黙らして金撒きあげて唾吐き捨てる。その後は……その後だ！」

行動方針が決まれば後は早い。いなほは快活な笑顔を浮かべ、へし折れた木を跨ぎ、真っ直ぐといづ名の適当な行動を起こそうとした瞬間。

その進路を遮るように緑色の何かがいなほの前に現れた。

「あ？」

思わず素つ頓狂な声が出る。

のつそりと現れたそれは、まさに異形だった。長身のいなほより、さらに顔一つでかく、腰巻一枚しかつけていないその怪物は、見た目も最悪だ。遠くでもわかる異臭に、豚を醜くしたような顔、体は丸々しており、どこか相撲取りを思わせる体だ。その手には一メートル以上はある木を削つただけの棍棒を持ち、明らかにこちらに敵意を放っていた。トロールと呼ばれる、この世界でも高い戦闘能力を誇る魔獣、それが今いなほの前にいる異形の名前だ。

普通の人間ならば、こんな化け物に会つたらその怪物然とした姿に怯え、一日散に逃げ出すだろう。だが、いなほはと言えば、その

姿を上から下までじっくりと観察したうえで、まるで変わらない、快活で、しかし犬歯を剥き出しにした凶相の笑みを浮かべた。

「おうおうおうー。豚を腐らせて一足歩行にしたようなツラいやがつて。『デケ』からつて見下してんじゃねえぞー？ ああんー？」

下から睨みつけながら、いなほが自らトロールへと歩を進める。人間には見えない生物だろうが、いなほには関係なかつた。こつちに敵意を持つて現れたのならば、それが例え子どもでも女性でも総理大臣だろうが一緒だ。

叩いて潰す。いなほの行動原理は単純だが、故に誰だろうがブレはしない。

トロールもいなほの戦意を感じたのか、静かに唸り声をあげて棍棒を強く握り直した。武器も魔法も使っていない人間如きが、こうして慣れたように自分へと向かつてきている。例え猿並みの知恵しかないトロールにもプライドがあつた。目の前の人間が自分を完全に舐め切っている。トロールにはそれが許せない。

「ガアアアアアアアア！」

「うるせえぞ豚面あ！ ギヤー、ギヤー吠えりやいにつてもんじゃねえ！」

互いに臨戦態勢に入る。剥き出しの野性が衝突。後一歩踏み込めばトロールの棍棒が直撃する距離で、いなほはサンダルを脱ぐと、両手の拳に力を込めた。

健康的な小麦色の肌が筋肉で隆起する。盛り上がる筋肉は、いなほの肌を引き裂いて溢れんばかりの力強さだ。敵を睨み、犬歯を剥いて奥歯を噛みしめる。相手は訳もわからない豚もどき。だがビビらない、ビビった奴が喧嘩で負けるのだ。

猛る気持ちとは裏腹に、構えは流麗、静寂の水面を彷彿とさせる静かな動作だ。体をトロールに対して真横に向け、右手を掲げトロールへと向ける。左手は腰に、重心を低くして、大地に根を張るよう構えた。

トロールの間合いより一步、いなほの拳か足には二歩、あの棍棒の威力は、トロールの体格的に見たら脅威だろう。だがいなほがトロールに一撃を『える』には、まず棍棒の一撃を掻い潜らなければならぬのだ。

大人でも容易にミンチにするだろう一撃。だがそんな一撃を前に、いなほが感じるのは恐怖ではなく歓喜だった。近隣では最早戦う相手はいなかつた。幼少より暴力に染まっていたいなほは、そんな現状に飢えていたのだ。自分と戦おうとする奴とのいつまづくくらいに楽しい喧嘩にだ。

だからやろう。すぐにやろう。もう言葉はいらない。本能の赴くまま、いなほは自ら死地へと飛ぶように右足から踏み込んだ。

大気の震えを産毛の一本一本で感じる。頭上を焼く殺意の奔流。違わず走るは魔獣の怒涛。

「ガアアアアアアアアア！」

待ち構えていたトロールの棍棒が振るわれる。魔獣の怪力の乗った棍棒の速度は、太った体躯に見合はず早い。

迫りくる正面衝突の悲劇。

描かれる脳漿の飛び出す地獄絵図。

だがいなほは、避けるでもなく、まだトロールを射程に入れていなほの間に踏みとどまる。否、大地を陥没させる程の凶悪な踏み込み。そして大地を破碎する運動エネルギーが、足の裏から盛り上がった下腿を周り膝へ。

膝で跳ねた力はそのまま大腿を駆け登り腰へと集束。溜まった力を腰を捻じり加速させて射出し、さらに倍加した力はタンクトップ

を圧迫するほど肥大した広背筋へと威力を連絡する。

その間にも回転した腰に引っ張られるように、いなほの左手は空氣の壁を突き破る勢いで走っていた。背筋に溜まった力は余すところか肥大させて左肩へ。筋繊維をサー・キットに駆け抜ける衝撃は、発射先である拳頭がけて突き進む。

尚もスピードを速める拳を押し出すように、左足で大地を蹴る。限界まで高まつたエネルギーは、最後の押し出しを持つて遂に爆発した。

「オラア！」

トップピングは獅子の雄たけび。物理的な破壊力と闘争心を乗せた極限の左拳が、その異常な反射神経を持つて疾走する棍棒へと着弾を果たす。

いや、それは最早爆撃と言つていいレベルだつた。魔獸の怪力すら凌駕する筋肉と技術のハイブリッドは、触れた瞬間に棍棒を容易く砕いたのだ。

言葉通り木つ端となつた棍棒の残骸が空に散る。だが、トロールは驚愕する暇もなく、遅く過ぎる映像の中で、確かにいなほの顔を見た。

凶悪に笑う男のなんたる恐ろしさか。こんなのは人ではない。魔法による強化も使わずに、魔獸の一撃を力で完封する規格外の突然変異のその一連。

ゆつくりと動く世界で、いなほは既に次の行動に移つていた。振りぬいた左拳を軸に、独楽のように回転しつつさらに一步距離を埋めるは大地を蹴つた左足。トロールにとつての危険地帯、そしていなほにとつての必殺の間合いに入り込む。

魔獸の脳裏を過る壮絶な死の予感。一回転しながら、いなほの右足が伸びあがる、勢いのまま回転が体を倒すことで変則、横から縦に、円を描いて虚空を切る足の踵が、ただそれを呆然と眺めるしか

できないトロールのこめかみ田がけて、

「うむああー」

咆哮に合わせて、直撃した。

胴回し回転蹴り。いなほの巨体には見合わぬアクロバットな絶技がトロールの頭蓋にて発生した。歪な顔は踵のぶつかつた部分を大きく凹ませ、余計にグロテスクな変貌をした。そのまま重力を振り払って飛んだトロールが、勢いのまま木にぶつかり盛大に幹を揺らしながら力なく大地に屈する。崩れ落ちるトロールは既に着弾と同時に絶命していた。

「ハツ……根性だけはよかつたぜ豚野郎」

トロールの骸の前に近づき、いなほはそう吐き捨てた。加減なく放った自身の全力。命を一つ奪つたことに対しても、いなほが感じたのは清々しい心地よさだった。

全力を出せば人が死ぬ。故に出せなかつた全力を出せたことは爽快以外ない。まあ相手には運がなかつたと諦めてもらおうといなほは両手を合わせて合掌。

「しかし……何だあ、この生き物は？」

もしかしたら猿の仲間かなんかなのだろうかと考えるが、生憎と考えるのが苦手ないなほは、一分も掛からずにどうでもいいかと結論した。どうせこいつは俺より弱い。ならそれ以上の意味はないはずだ。

切り替えは早く、とりあえずこいつは埋めるのが礼儀なんかとよくわからん思考に至つたいなほは、早速トロールを埋めるための穴を掘ろうとした。

「つて、随分、」機嫌な雰囲気じゃねえか

だが、いなほの驚異的な闘争を嗅ぎわける嗅覚が、どんどん自分の周りに集まつてくる気配を敏感に感じ取っていた。草木をかき分け大地を揺らす、巨人達の群れの行軍。

木々に阻まれ見えないが、おそらく十に届く程度だろうか。姿を現すトロール達、怪力無双の魔獣の集団。粘りつくような殺意の奔流が、いなほの本能を直接刺激して、アドレナリンを分泌させる。

「ああ？ 仇取りに来るたあ氣合い入つてんじやねえの」

指の骨を鳴らしながら、いなほは自分を取り囲むように迫るトロールに向けて笑つた。

面白い。ここが何処かもわからないが、自分に対して『調子のいい』野郎が吐いて捨てるほど現れるのは嬉しい限りだ。命のやりとりなど数える程しかやってないが、どどのつまり喧嘩と何一つ変わらないのは立証済み。

どつちもビビった奴が負けるのだ。

「行くぞオラア！」

いなほは完全に周りを取り囲まれる前に、まずは真正面のトロールに突撃した。素手の人間の奇襲を予期していなかつたのか、驚きたじろぐトロールへ「おせえ」と一言に合わせて、肥え太った腹に正拳突きを一撃。充分加速を伴つた拳は、トロールの腹に深々と入りこむと、まるでボールのようにその巨体を空に舞わせた。血反吐を撒いて、トロールが地に沈むころには、新たなトロールを狙おうとしたいなほ目がけて迫りくる一体のトロール。

「グオアアアアアアアア！」

「グラアアアアアアアア！」

「ハツ！ 絶頂だあ！」

高々と頭上に掲げられる一振りの棍棒。叩きつければ人間をたちまち弾ける血袋となす攻撃に応じるいなほの対応は、まさに常人の考え方の外れだ。

「オオオ！」

違わず落ちる木の塊を、いなほの両手ががつちりと捕らえる。その衝撃にいなほの足首までが土に沈んだ。今まで感じたことのない強烈な重さに、いなほの両手がぶるぶると震える。単純な質量では圧倒的に負けるトロールの渾身を一つ、ただの身体能力でこれと拮抗するいなほの筋肉の異常は推して測るべきだが、少しづつ両手持ちの棍棒に押されて腕が下がり始めてきていた。

「俺、と、腕比べ、たあ、いいタマ、してやがる、ぜ……ー、ぎい
……ー？」

歯を食いしばり、唸り声。盛り上がる両腕の筋肉は既に限界を訴え悲鳴を上げている。だが、普通ならトロールとの力比べなどというイカれた行動などせず、力を逸らすなりして棍棒をいなすのがこの場では最適な方法だろう。勿論いなほにはそれを成したうえで反撃する技量があるのだが、あえて彼はその選択を廃棄した。

男と男（？）の真っ向勝負で、力を逸らすなどといつまらない選択を選ぶなど馬鹿げている。

「アアアア……！」

だが内心の気合いとは裏腹に、いなほの膝は折れ、今にもトロール一体の怪力の前に屈服しようとしていた。その事実に喜悦を覚えたのが他ならぬいなほだ。自分が窮地であることをが楽しいと思うその精神は、まさに戦闘者としての本能か。

浮かぶ笑み。攻撃的な歓喜が、押されている自慢の筋肉を刺激する。まだ、この程度で俺が屈するわけがない。これ以上ないと思われた筋肉の肥大がさらに起こる。いなほの筋肉が、まるでアクセルを踏み込み勢いよく回転しだしたエンジンのように発熱し、あまりの熱量に蒸発する汗が湯気となつて体から舞い上がった。熱した鉄か何かか、人類の規格を凌駕した筋肉は、今まさに鋼の如き変貌をなしえていた。

「グギヤ！？」

トロールが困惑の声を出す。押しこんでいたはずの棍棒が、何故か徐々に自分のほうへと押し返されている事実が一体の怪物に驚きを与えていた。

そして驚愕を叩きつけた本人はといえば、膝を持ち上げ、腕を突き出し、そして一気に棍棒を押し返したところで、幼い子どもの胴程度はある棍棒をただの握力だけで握りつぶした。

「ハツハー！ 最高だああ！」

頼りの武器を失った一体にいなほは飛びかかると、鋼の腕で首にラリアットをかました。分厚い皮と脂肪と骨に守られているはずのトロールの首が、それ以上の硬度を持つ肉体の爆撃によってたまらず破碎。一撃で命を刈り取られたトロール一体が沈むといなほも着地。さらに前には三体のトロール。焦らず中央の奴の懷に潜り込み、

鳩尾に拳を叩きこむ。

三度吹き飛ぶトロール。いなほは吹き飛んだ奴には田もくれず、左右にいる魔物を交互に睨んだ。戦いに飢えた獸の眼に見据えられ、頭の鈍いトロールですらようやくいなほという化け物が、自分達を大きく上回る戦力を持つことを理解した。

恐怖から、後ずさるトロール。だが既に戦意を失ったところで、全力での戦いに酔ういなほが攻撃の手を休めるわけがない。次はどいつをぶつ飛ばすか。両手を大きく広げて拳を作る。

「次い……よあやくよあ。俺の小せえ脳みその奥のほうがギンギンしてきたんだ。もっと派手に決めようぜ」

左右に田配せ。ぶん殴りにこいと、あえて挑発するいなほどだが、行けば死ぬのが確定している死地へ行こうとする程トロールは馬鹿ではない。

残された手段は少なく、故にトロールは、何も考えず尻尾を巻いて森の奥へと逃げ出した。

あまりにも唐突な戦いの終わりに、暫くいなほは馬鹿みたいに口を開けて遠くなつていくトロールの足音を聞き続ける。だが次第にその体がわなわなと震え、遂に爆発した怒りのままに地面を思いつきり踏みつけた。

「テツ……メエラアアアア！ それでもタマあ付いてんのかあ！」

激昂。野獣のような絶叫をあげて、いなほは自分の左側にいたトロールに狙いを定めて走り出す。

まだまだ戦い足りないので。欲求不満で憤る心のまま、いなほは深い森の中を足音目がけて疾走を始め、

「見つけた……！」

その途中、運よく立ち止まつたトロールを見つけて、いなほはそ
いつ目がけて襲いかかった。

第一話【ヤンキー彼女】（後編）

次回、少女とヤンキー

第三話【ヤンキーと少女】

「おい。何ガキに手えだそつとしてんだよ」

え、と疑問を口に出す。涙で滲んだ少女の視界に、トロールとは違う、不思議な出で立ちの男が立っていた。トロールより低いが、充分に大きな体と、細いように見えて、綺麗な調度品のよじな筋肉は、太陽の光を反射して何故か神々しく感じた。

強い意志の籠った目は、違わずトロールへと向けられている。そして少女を掴むはずだったトロールの醜くぶよぶよとした腕は、男の逞しい腕に掴まれ、それ以上少女へ近づくことができなかつた。

「ギヤギヤギヤ！？」

トロールの混乱は、突然の乱入によるものではない。たかが人間の腕の力で、自分の腕を全く動かすことができないことに混乱していた。怪物にとっての悲劇は、先程の戦いに参戦しておらず、男、いなほの能力を知らなかつたことか。

だが万力のようだつたいなほの手が突如緩められてトロールは拘束から脱することができた。掴まれた部分はうつ血しており、緑色の皮膚にいなほの手形がくつきりと残つている。

「ガアアアアアアア！」

トロールが怒りのままに咆哮した。叩きつけるような声を聞き、少女はたまらず耳を塞いで縮こまる。そんな少女を庇うように、トロールとの間にいなほは立ち塞がつた。

「あ、あの……！」

少女は、武器も持たず、魔法も使おうとしないいなほに危ないと声をかけようとしたが、恐怖から上手く声を出すことができない。いなほは少女に振り向くことはせず、ただ拳を天高く突き上げることで応じた。鉄塊を思わせる拳を少女は目で追う。光に濡れるそれはやっぱし綺麗で、見ているだけで体を捕らえていた恐怖の鎖が解かれしていく。

「ガアアアアアアアアア！」

だがそんな少女を現実に引き戻すのはトロールの雄たけびこちらに迫る地鳴りのごとき足音だ。巨体を揺らし襲いかかるトロールに対し、いなほは掲げた拳を腰のために、迎え撃つように腰を落とした。

「危ない！」

少女の悲鳴は当然だ。普通、トロールといつ魔獸を打倒するためには、装備を整えた兵士が数人、または熟練の冒険者でなければ打ちが難しいとされる生き物である。

だというのに、目の前の男は、肌の露出の多い衣服しか身に着けておらず、武器もなければ魔法を使う気配すらない。

言つてしまえば生身一貫、己の肉体のみで肉体という点で人間を凌駕するトロールと対峙しているのだ。

「おひ、ありがとよ」

少女の叫びに、いなほの返事は場違いなまでに軽い。そこらに散歩にでも行く気軽さだ。だが少女の悲鳴が当然ならば、いなほの余

裕もまた当然。ここに至るまでに、何匹ものトロールを葬つたいなほからすれば、今更一体どうしたところではない。

見慣れてしまつた棍棒が頭上より来る。いなほは慣れた動作でそれを避けると、対象を失い前めりになるトロールの顔面に、カウンターの拳を突き出した。

「そりあー。」

巨体を持ち上げ、拳は振り切られた。まるで体重がないかのように吹き飛ぶトロールが木と接触し崩れ落ちる。少女は人類が力で勝る魔獣に単純な力で勝つた事実に目を見開いた。

「凄い……」

他に出る言葉がない。「チツ、野郎ども完全に逃げやがったか」ぼやくいなほを、少女は驚愕一転、今度は神聖なものに祈る巫女のようになんて羨望の眼差しを向けた。

「本当に、勇者様」

「あつ？」

声に釣られて、ようやくいなほは膝をついたままの少女を見た。向けられる視線に込められた尊敬を感じてか、いなほはむず痒そに頬を搔く。「あー……」何か言おうとするが、生憎と女さらにはガキの対応なぞしたことのないいなほは、何を言つていいかわからず、とりあえず手を差し出した。

「立てよ。いつまでもケツ汚す必要はねえだろ」「

「あっ……」

慣れないことに恥じて、赤い頬を知らず、少女は差し出された大きくて固そうな掌に視線を移した。

たくましくて、鎧のように堅牢だといふのに、大樹の「」とき安心感のある無骨な手。少女はいなほの手をマジマジと見てから、次いで自分の掌を見た。土で汚れ、畠仕事と毎日の家事でひび割れかさついた自分の手。目の前の強くて傷も知らない鎧の手と比べ、なんと汚く、弱弱しいのだろう。

そんな自分の手で、はたしてこの手を握つていいのか。逡巡する少女に、いなほはしひれを切らしたのか、その手を無理矢理掴んだ。

「ひや……！」

強引に立たされると、少女はいなほの大きさを改めて認識した。トロールに比べ低くはあるが、それでも充分人間にしては巨大な体躯と、その体がまとう細くしなやかな筋肉は、パツと見は確かに鍛えて入るが、トロールを打ち倒せるほどには見えない。だが、間近で見た今ならわかる。皮膚の内側の筋肉は、一本一本の纖維すら感じられるほどの力強さを放っていた。一体どんな鍛錬をすればこの境地にいたるのかわからない。

「やつぱし、勇者様だ」

だから少女は確信した。家に唯一あるおとぎ話の絵本。そこに描かれていた悪を打倒する強き正義の勇者。それが彼なんだと少女は信じた。

「勇者あ？」

だが言われた当人であるいなほとしては意味不明である。偶然助けた女が、何を思ったのか自分を勇者と呼び潤んだ眼差しでこっちを見ている。

とりあえず、立ち上がった少女が日本語を話していくことに感謝した。天然だらう肩まで伸ばした金髪と、緑色の大きな瞳に、形のよい高い鼻、そして透明感のある白い肌の少女は、いなほの胸よりやや低い背丈しかなく、見た目の幼さと相まって、そこそこに可愛い少女ではあるが、いなほ的には後数年先に期待といった感じである。おそらく十四、五歳程度といったところか。ともかく、そんな見た目であったため、まさか会話が通じるとは思わなかつたのだ。

それにも田舎っぽい服装である。使い古されてよれよれのシャツと、足もとまで隠すぼろぼろのスカートとは、まだいなほの服のほうが丈夫であろう。靴もぼろぼろで、ただ底がある程度といった感じか。

まさか初めて会つた人間が（いなほとしてはトロールは豚の進化系でしかない）ホームレスとは、内心少女に対しても失礼なことを考えながら、まずはとばかりに、少女の手を握つたまま、力加減に気を付けてもう少し力を込めて握つた。

「いなほだ。早森いなほ、俺の名前な。テメエは？」

「えつ！？ あつ……わ、私はエリス、です……あの、助けてくれて、ありがとうございました！」

少女、エリスは言い終わると同時に頭を勢いよく下げた。手を離したいなほは「まあそりやついでだから氣いすんな」などと感謝にむず痒そうにして眉をひそめ、照れ隠しを喰く。

流石勇者様、謙遜するなんてなんと奥ゆかしい。などと、エリスは勘違いをする。だが実際彼女の目の前にいるのは、勇者などという強く優しく凛々しい人ではなく、気合いと根性と喧嘩が大好きで

しかない場末のヤンキーでしかないのは何たる皮肉か。

「とりあえずよ、ここが何処かさっぱりなんだ。エリス、どつか近くの町まで道案内頼むわ

「道案内……そうだ！ 皆ー？」

突如、エリスはこれまで見せていた安堵の表情を青ざめさせた。そして弾かれるように走り出そうとして、足首から走る痛みにバランスを崩しその場に倒れた。

「オイ！」

慌ててその体を抱きとめる。そこにはいなほはようやくエリスが足首を痛めていることに気付いた。

「つ……村に、皆が……！」

「なんだかわからねえが、村にいきてえのか？」

エリスはいなほの問いに頷く。「あの……」お願いだから村の皆を助けて、そう続けようとしたエリスの頭に、いなほはその大きな掌を乗せた。

「理由は知らねえ。だが、状況は理解してゐつもりだ。あの豚、お前の村に来たのか？」

「は、はい」

「任せろ」

搔き鳴るようで、エリスの頭をなでると、荷物を持つかのようないなほはエリスの体を肩に担いだ。

「わわ！」

いきなり高くなつた視界にエリスがたじろぐ。その反応が可笑しくて、いなほは口を弧にして笑つた。

「んじゃ、道案内は任せたぜエリス」

「は、はい！」

「ク」「ク」とエリスが応じて指を指した方角に向けていなほが駆け出す。

その一步こそ新たな門出。不倒不屈の不良の冒険が、今始まる。

第二話【ヤンキー少女】（後編）

次回、ハイパークロタイム

第四話【ふつさんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり（前書き）

タイトル通りキツい表現があるので閲覧には気をつけてください。

第四話【ふつふとヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり

「皆……！」

いなほの肩に担がれたエリスは、指をさして村の方向を示しながら、はぐれてしまった家族と友人を思い、焦燥感に駆られていた。森をまるで猿のような軽快さで駆けるいなほも、そんなエリスの横顔を見て、一層速度を速めた。

喧嘩で熱くなつた思考はすっかり冷えている。改めて思えば、あのトロールはこれまでいなほが戦つた生物で一番強かつた。それでもいなほの敵にはならなかつたが、問題なのは、あれが複数来た場合、はたして普通の人間が相手できるのかということだ。

いなほの中でのトロールの位置づけは拳銃で武装した人間よりも高い。走りながら、先程エリスの気晴らしになればと考えトロールのことを聞いたが（この状況の当事者についての話をする時点で気晴らしにはまるでならないが）、どうやらトロールはHランク相当の敵で、一体倒すのに武装した兵士が幾人も必要らしい。

そんな魔物が群れで襲ってきた。頭の悪いいなほだが、野獣の如き本能が状況が危険であることだけは理解した。

「間に合えよ……！」

加速しながらも、木々にエリスが当たらないように気を配りながら進むいなほ。エリスの焦りをわかるからこそ、彼の内心は逆に冷静になつていた。そして、話を聞いた上で、最悪な状況も脳裏に描く。

そして、遂に抜けた森の先に広がる光景は、いなほが思い描いた以上に最悪な結果そのものだった。

視界一杯に広がるのは、質素でありながら、それでも穏やかな空気と、暖かな人達が暮らしていたエリスの生まれ育った村の姿ではない。そこにあるのはトロールの群れによりなすすべなく蹂躪され、荒れ果てた村のなれの果てだ。

家屋は倒壊し、作物等を育てていた田畠は荒れ果て、その崩壊した村を、優しかつた村人ではなくトロールが闊歩していた。その周りには村人達の見るも無残な死骸が転がっている。一撃で頭を砕かれた死体は、まだ幸せなほうだったかもしない。

手足を潰された少年の苦悶に満ちた残骸。

破られ、最早身にまとう衣服ではなくただの布切れを体に羽織り、トロールのあらう汚い体液に穢された、この世で最悪い近い蹂躪を受けて絶命した少女の骸。その周りには少女とおなじように、トロールに翻られ死んだどうう女達の死体が積み重なっていた。

張り付けにされて体中を殴られ死んだ者もいた。

もう死んでいるのにトロールに振り回され遊ばれている者もいた。棍棒の代わりに使われ、それを持ったトロール同士の試合に使われている者もいた。

「あ、うあ……」

エリスはそこまで見て、これ以上見るために耐えられず嗚咽を漏らしながら目を閉じた。

トロール達は笑っている。下衆な鳴き声を轟かせて、村人達が大切に育てた食料を乱暴に食べ散らかし、村人達を『遊び道具にして』笑っている。

これが魔獣だ。人間が恐怖する魔獣の姿だ。躊躇なく人にとつての絶望を振りまく最悪の天敵。

「う、うえ……」

肩に担がれたままのエリスが、我慢できずに嘔吐した。手で押さえるが、溢れた内容物はいなほの体を容赦なく汚した。だがエリスにはそのことを謝罪する余裕もなかつた。手で押さえる気遣いが出来ただけでも上等だ。

そしていなほは、体を汚されていることを気にする余裕もなく憤怒していた。

「テメエら……テメエ……テメエら……！ やつたな……やりやがつたな……！」

エリスが目を瞑つていたことは不幸中の幸いだつただろう。もし今少女がいなほの顔を見ていれば、あまりにも壮絶な険相い意識を手放していくに違いない。最早、いなほの形相は鬼のそれだつた。だがどうにか残る理性でエリスを下ろすと、蹲る彼女には目もくれず前に、地獄を具体した村へと踏み込む。

いなほは生まれてこのかた死体を見たことは片手で数える程度にしかない。それですら事故にあつた仲間や、抗争の結果頭を強く打つなどして運悪く死んだ奴と言つた程度だ。このような直視すら難しい死体を見たことはない。なら普通はエリスのように吐いて、泣いて、蹲つて、どうしようもない現実に打ちのめされるはずだ。

だがいなほは怒つた。悲惨に憤怒し、激昂した。体の内側から沸き起つる感情の波は、いなほはひたすら前へと押し出す。気分を速度で表すなら既に音速は振り切つた。白熱する鼓動と、運動して盛り上がる血流、五臓六腑を疾走する音速の鮮血は、いなほの骨と肉に際限なく沁み渡り起動を促す。

心臓がライブハウスのバンドの音楽のように五月蠅い。だが騒音のビートが今の自分には似合つていると頭の片隅でいなほは思った。なんせこのゲロを吐きたくなるような状況だ、狂つた音が相応しい。

「「ヨキゲンだ……隨分とユカイな光景じやねえか……！」

吐きだす吐息も熱を帯びていて、浮かぶ笑みと言葉とは裏腹に、赤く沸騰するマグマのような心は奴らへの絶殺をすでに確定していた。

ようするに、いなほはこの状況に驚くでも怖がるでもなく、単純に『キレてしまった』のだ。

眼下の地獄へゅっくり歩み寄る。いなほの周りに浮かぶ怒気に感付いたのか、村で好き放題していたトロール達が一斉に森から現れたいなほを見た。

「こ」が何処かもわからねえ。お前らが何なのかもわからねえ。でもよ……」

一歩一歩、踏み出す足はサンダルを脱ぎ棄てている。素足のままの歩行は、その一踏みごとに大地を揺らし、土を抉っている。土に沈む足はまるで雪原を歩いているかのようだ。それほどの踏み込みで歩くいなほの心境は、最早筆舌も出来ない。

燃えるような怒りを、殺戮を決定した筋肉が指示する。抉れる大地は貴様らだと、足蹴にせんといなほが行く。

「瞬殺だぜテメエ らああああ！」

言葉に偽りはない。初速で最速、大地を抉る脚力の踏み込みは、いなほの近くにいたトロールにあつた十メートルの距離を瞬く間にゼロにした。

そのトロールからしたら、まるでいきなりいなほが消えたように見えただろう。懐に潜り込んだいなほは、握りこんだ拳を腰だめにすると、バネ仕掛けの「」とき勢いでトロールへと解き放つた。

吹き飛ぶ
であつたらまだよかつただろう。トロールの腹に直

撃したいなほの拳は、その肥え太った腹を貫通していた。背骨も砕き背中から飛び出た拳にまとわりつく生温かく、腐臭を放つ臓腑を意識もしない。回復は絶対にさせないとばかりに、捻じりながら拳を引き抜くと、空いた穴から血が噴き出していなほを染めた。しつかり赤いじやねえか。狂喜するいなほは鮮血を頭から浴びて嘲る。

「ガアアアアアアアアア！」

そこでようやく他のトロールも気付いたのか、二十を超える魔獣の群れが同胞が死んだことに憤り咆哮する。それまで遊び、または蹂躪していた村人を「ミミ」のように放り出す様に、いなほの怒気がさらに膨れ上がった。

その尋常ではない狂気に気付くことはない。本来なら有象無象の人間など、トロールにとって相手ではなかつたはずだ。だが、この瞬間大勢は決まる。刈られる対象こそが己だと理解した時には、トロール達は全ていなほの人間の範疇を超えた理不尽すぎる筋力の暴虐によつて、ものの十分もせずに壊滅するのだから。

殲滅に至る過程には意味はない。逆に蹂躪される側になつたトロール達は、先程森でいなほの強さに怯え逃げた者と同じように、半数が容易く葬られた時点で逃げ出した。だが怒りに猛るいなほはその超人的な脚力で、鈍重なトロール達に追いすがり、今度こそ逃がすことなく殺し尽くした。

「ふつ……ふつ……はああ……」

流石に疲れたのか、顔に付着した血を拭いながらいなほは肩で息をして、周囲への警戒を行いながら呼氣を整えた。村にはトロールと村人の死骸が転がつていい。戦いの最中、周囲に無事な人間がいるか確認したもの、無事に思える人は確認できなかつた。だがもししかしたら家屋の中に入るかもしれない。

「……その前に、だな」

いなほは森の手前で未だ蹲るエリスへと歩み寄った。体を震わせ、亀のように縮こまる少女の肩を叩こうとして、その手が赤く染まっていることに気付き、寸でで止めた。

「おい」

変わりに、彼にしては比較的穏やかに（普通の人からしたら威圧的ではあるが）声をかけた。

だがエリスからの返事はない。何事かを呟きながら、一向に顔を上げようとはしなかった。

「……あいつらをあのままにほじておけねえからよ。墓を作るから何かあつたら呼べ」

かける言葉が見つからないとはこのことだろう。普段相手にしている悪ガキなら叩いて無理矢理起き上がらせるが、相手は少女、しかも育つた村の人間が蹂躪されているのを見たとなれば話は別だ。居づらそうに眉を潜めたいなほは、辺りを警戒しながらも、トロトロの持っていた棍棒を拾い、素手で真ん中から『引き裂く』と、適当に開いた空き地で裂いた棍棒をスコップ代わりにして穴を掘り始めた。

「つたくよ。俺ア何やつてんだかね」

事故にあつたと思つたら、よくわからん奴のいるよくわからん場所に飛ばされ、少し話したと思つたら光に包まれ。そして光が收まつたと思えば森の中、さらに見たこともない巨大で醜い豚もどきと

の盛大な殺し合い。

「そんで、やつたこともない墓作りたあ、俺もヤキが回ったか」

水でも掬うかのような手軽さで土を掘りつつ、自分の境遇に苦笑する。これまでも喧嘩に明け暮れた生活だったために、決して非凡な人生だったとは言えないが、こうも滅茶苦茶なことは人生で初めてだ。

あつという間に人一人分の穴を十個作れば、空き地に穴を掘るスペースはなくなってしまった。とりあえず掘った分だけ埋葬しよう、そう決心したいなほが振り向くと、そこには未だ泣きながらも立ち上がり、足を引きずりながらもいなほの傍に近づくエリスがいた。

「あー……大丈夫か？」

すぐ傍に来たエリスは、下を向いていなほを見上げようとはしない。

だからガキかつ女は苦手なんだ。髪を乱暴に搔き巻り、一二の句を告げようとした瞬間、エリスは勢いよく顔を上げた。

「あ、あの！」

「お、おおー？」

身を乗り出しながら叫ぶエリスの迫力に、さしものいなほも驚いたのか一歩後ろに後退した。

エリスの瞳は、さつきまで蹲っていたとは思えないくらい強い意志が見て取れた。いなほが穴をせつせと掘っている間に一体何が起こったというのか。

「私も、私にも手伝わせてください」

「手伝うつてーと……墓か?」

「は、はい」

何度も頷くエリスに、いなほは先程と違った驚きを感じていた。何か知らないが、必死に目の前の死を受け止めたのだろう。そのいなほより遙かに小さく、弱弱しい細い体で、親しい人と、住み慣れた村の破壊を見て、しかし立ち上がった。

内心を知ることはできない。おそらくはやせ我慢だらうし、ただ単純に現実を理解することを手放しただけなのかもしない。でも、立ち上がれたことは事実で、いなほはエリスに最初感じた弱いというイメージを訂正した。

彼女はその心の在り方が強いのだ。
だからこそ、少女の下した決断に対し、いなほは確然とした態度で、

「駄目だ。足怪我してんだ、邪魔だから失せろ」

そう言って、エリスの足首を指差した。

「あつ……でも、私……」

言われて、確かにただでさえ肉体労働もできないのに、足を怪我しているとなれば、邪魔以外の何者でもない。

それでも何かしたいと目で訴えてくるエリスに、困った風にいなほは頬を搔いた。

「思つてゐる……」

「え？」

「死んだ奴らを、思つてやれ」

目をまん丸に見開いて、エリスはいなほの言葉を聞く。柄にもないことをしたな。いなほは恥ずかしさを隠すようにエリスに背中を向けると、空いている空き地に向けて逃げるよつに歩き出した。

第四話【ふうさんヤンキー魔獣狩り】 グロ表現あり（後書き）

次回、暫くの世界説明

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6548y/>

不倒不屈の不良勇者 ヤンキーヒーロー

2011年11月20日16時32分発行